

ムーヴメンツの外観と印象

ムーヴメンツは、私たちがふつう目にするどんなダンスや体操とも似ていない。その多大なレパートリーのなかには、バレエやリズム体操やフォークダンスを思わせるものも多いが、それでもそれらとは決定的に異なっている。一部のレパートリーは神聖舞踏と呼ばれるが、崇拜や信仰とは無縁である。インドやバリの宗教舞踏や民族舞踏のイメージもあてはまらない。また、個人的なレベルでの感情や美意識の表現を奨励しない点で、西欧的あるいは現代的な身体芸術とも、あきらかに異なる。



パリとニューヨークでのムーヴメンツの公演を見たジャーナリストたちは、それを形容する適切な言葉を見つけられなかった。当時の批評には、「高度の筋肉制御を要するアクロバット」、「東洋起源の奇妙な踊り」などという的外れな表現が見られる。それでもグルジェフの弟子たちの踊りは、ニジンスキーを育てたことで有名な興行家ディアギレフや、スクール・オブ・アメリカン・バレエの創始者リンカーン・エドワード・カースティンらを、いたく感動させたのだった。

ムーヴメンツについて簡単に描写するのがむずかしいのは、それが複数の印象を同時に与えるためである。動きとそのパターンは、その本来の性格として多彩な側面をもっており、ムーヴメンツでは、そのすべての側面に綿密な計算が施されている。位置、速度、角度、タイミング、作用と反作用など、物理的な側面だけでも数多くある。そのすべてを同時に意識するのは不可能であり、たとえば位置と速度とは同時に意識できない。それでもこれを試みるなら、人はたちまち非日常的な知覚の世界に誘導される。玉突きに熱中したことがある人なら、これを理解できるかもしれない。

ムーヴメンツのほとんどに共通する特徴をいくつか挙げるが、読者は、それらが組み合わさったときに生まれる総合的な印象を想像しなければならない。ここで挙げるのは、経験をつんだ弟子たちによる質の高い演技に見られる特徴だが、それらはムーヴメンツを学ぶすべての人の目標でもある。

まず気づくのは、姿勢と動作の正確さだろう。ムーヴメンツは、幾何学的な正確さをもって定義された複数の姿勢と動作から構成される。姿勢を構成する要素のうちいちばん目立つのは、腕のポジションだろう。そこにはしばしば、九十度、六十度、四五度、三十度といった、ピタゴラス的角度が観察される。それらの角度に沿って、定規をあてたように正確に、腕はまっすぐに伸ばされたり、曲げられたりする。女性的な動きのなかでは、ひじが軽く曲げられ、腕全体がゆるやかな曲線を描くことも多い。



それぞれが同じぐらいの重要性をもつ複数の焦点をもった動きを想像できるだろうか。そのような動きを意識的に制御する能力は、人間が無理なく発展させられるものでありながら、その重要性が理解されることさえほとんどない。これは未開拓の能力だが、特殊な能力ではなく、高度に発達した運動能力などよりも、はるかに人間らしい能力である。



ここで人間らしいというのは、「人間のみにも備わった」という意味でもある。高度な運動能力というのは、基本的には動物の能力であり、スポーツ選手の超人的な演技を見ても動物は驚かない。一方、ムーヴメントに含まれる複合的な動きのパターンは、ほんとうに動物を驚かせる。たとえば、左右の人差し指を立てて、右手を前方に一気に突き出してはゆっくりと引いていく動作を演じながら、左手では一定の速度で円を描く動作をしてみせると、犬や猫は、おもしろいほど困惑した表情を見せる。自己を構成する複数の部分をこのように操る能力は、ほとんどの人間にとっても知られざる能力だから、犬や猫だけではなく、人間もまた、このような動きから大きな衝撃を受ける。



踊り手はふつう六列に並ぶ。各列が異なる動作を演じながらも、そこには驚くべきタイミングの一致と、全体の調和が見られるだろう。彼らは、あたかもパズルのように、たがいの位置を入れ替わっていく。複雑な移動のパターンを描きながらも、そこには一瞬のためらいもない。全体のなかでの自分の位置を、ひとりひとりが完全に把握しているのが感じられるだろう。彼らが空間上に描く軌跡には、幾何学的なパターンが見られる。多くの場合、それは間接的に、グルジェフが西洋に伝えた神秘的な図形、エニアグラムをあらわしている。



だが、こうしたことにも増して印象的なのは、踊り手たちの目や表情かもしれない。また、彼らの身体から発するよう感じられる、特別な質をもった存在感かもしれない。それは普遍的な存在感であり、山や川や海のもつ存在感とも比べられるが、それは人間のみにも可能な存在感だから、じつはそれ以上のものである。それは、人間が内面の奥底に見いだす普遍的な存在のあらわれだという。それは、見る者をぞくっとさせる。そのとき一瞬、ある種のエネルギーが背骨をかけるのぼるのを感じられるだろう。それは感情に訴え、強い郷愁に似たものをハートにもたらす。